

氷筍集

五月号 2025

オリオンの傾き深く明けにけり	齋藤 亜矢
ベランダの干物揺さぶる空つ風	大石 高典
登校の杞憂やバレンタインの灯	鈴木 大輔
初明り阿修羅の指の影動き	田中 白秋
春の雪傘を逆さにして受くる	加藤 剛
春寒を言うて大人の座に入りぬ	有岡 萃生
辛夷咲く波の耀き増して来し	片岡 和子
青空にかざせば青き氷かな	伊東 弥生
春の雪猫にあらざる跡のあり	中島 冬子
三桎のひかへめの黄の豊かなる	城戸崎雅崇
豚汁のおかはり二杯受験生	立石 律子
着信音あと追ひかけて虎落笛	加藤 広文
水遣れば土の香の立つクロッカス	小畠 和
青空へかける言葉よ息白し	宮坂 美緒
寝返りの背に猫の手や月朧	河村 純子
曇天の彩りとなり寒椿	寺川 貴也
春泥や道に迷ひし若き頃	坂岡 隆司

春立ちぬ夕闇のいろ新しく	昌山瑠美子
田遊びの餅にて作る鎌と鍬	丹羽 康夫
草萌ゆる本所深川路地の鉢	柳堀 悦子
閏年の除夜や除夜香十三種	平井 彰子
思ひ遣る故郷の豪雪つづく報	羽尾 芳樹
春近し校門前に佇む子	入江 祐子
道沿ひに誰が植ゑたるか水仙花	小林きみ子
雪しまくなり煽る風唸る風	坂 利美
夕映に後ろ押しされて蓬摘む	大畑 照子
春浅し駅片隅の貸文庫	小堀 恭子
たんぽぽの黄に在来種外来種	前田 鈴子
大雪を能登に降らせて晴れてくる	石原ゆき子
鼓の音響く西陣雛祭	國兼 弓華
覇気の消えたり夕方の雪だるま	佐藤 慎一
春の炉や美山の薪をくべ足して	藤本 隆子
ルージュの蓋そつと閉ぢたり花ミモザ	細見 昌代
悴みてをれば小さくなりし母	杉浦 康子
赤い実を残して消えし雪うさぎ	土居 郁雄
道真の焦がれし梅の香はかくや	矢野 裕俊
手袋の重さことさら春近し	米倉 大司
妖精の棲む香りかと水仙花	田崎セイ子

氷筍集

四月号 2025

口能登の半旗掲ぐる初御空

福江ちえり

いそいそと寄り道けふも冬菜畑

福のり子

評伝の片手に重し枯芙蓉

有岡 萃生

カーテンを閉め直す夜の寒さかな

加藤 剛

初富士へ遠投の竿振りかぶり

小畠 和

万両の赤や離宮の空広し

田中 白秋

翁飾そこに年明け能舞台

河村 純子

鯛焼や散歩がてらに寄る屋台

中井 昭雄

革靴を磨けば春は遠からじ

鈴木 大輔

冬の日の温もりためて石の橋

田崎セイ子

お正月を好きになれぬと一人つ子

中島 冬子

まんまんさんあんぷくぷくと初参

前田 鈴子

枯芝の光に埋もれ猫は野良

朝田 玲子

初春やペン先磨き母へ文

鳥居 裕子

波之上と名のつく宮へ初詣

福田 将矢

初風呂や下駄箱の錠響き開く

田中 白秋

牡蠣小屋に持参のバター香り立つ	田中 勝
母さんに問ひつつマフラー編む子かな	西澤 勝
百十円に切手を合せ福寿草	森川恵美子
病院の寒灯ひとつ夫の窓	高松 房子
藁の蛇飾る松過ぎ六義園	城戸崎雅崇
初場所やいよよ華やぐ溜席	斎藤よし子
元朝も待つ人のをり介護の手	秋山 陽子
一字目の筆圧強し初日記	石田 信之
雪を掻く出掛ける用はなけれども	岩見三七夫
それぞれが家族の戻る五日かな	坂 利美
半日は挨拶回り初仕事	大畑 照子
雪起しわつと駆け出す登校児	小堀 恭子
寒の土掘ればぬくみの仄かなり	小堀 尚美
ストーブに預けし煮物ふくふくと	中村 淳子
刈り込みし庭のうつすら初景色	山田ミチ子
湖の釣り一艘の冬深し	荒木 昭代
松の辺を白鷺翔る寒の入	國兼 弓華
湖北よりの客車は雪を乗せて来て	林 剛
中指の切り傷ひと小正月	細見 昌代
初春やいつもの道の新しき	杉浦 康子
北風の訓練重き消火栓	大村 誠

左に杖右手に筆や年の酒

玉元 庄弘

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

二月号 2025

ため息の一つまじりし夜露かな

福 のり子

窓開けて台北の冬匂ひ立つ

小 崑 和

まつすぐに墨を吹き上げ寒の烏賊

大石 高典

菰巻くや幹をひと撫でする庭師

中 島 冬子

十秒の不在か在かかいつぶり

齋藤 亜矢

枯蔓の取り払はれて売家札

朝田 玲子

接待の飴玉まろし冬麗ら

田 中 白秋

オリオンの夜を煌々と医療の灯

福江ちえり

病棟はゆふやみのいろ冬木立

牧田満知子

柿の実の消えたり熊の爪の跡

森川恵美子

猫の影が障子を来るよ冬うらら

荒木 昭代

雪積り富士は正しく富士となり

伊東 弥生

園児らの秋蚕の繭の十個ほど

立石 律子

冬めくや生きもののごと竹を編む

谷口 文子

初めてのボーナスに買ふ背広かな	福地 義雄
ストーブの薪運び込む日課増え	藤本 隆子
三方五湖の辺や姑の凝鮒	前田 鈴子
選ばれし冬至南瓜ぞ納屋の隅	森 幸子
低吟の路地を過ぎゆく寒夜かな	加藤 広文
火の番の声一寸のずれもなく	加藤 剛
地のこゑの鎮もる銀杏落葉かな	鈴木 大輔
年の瀬や母のつまづく車止	有岡 萃生
長男は餅のあふるる雑煮椀	國兼 弓華
千両の赤い実なれど仏花とす	原 順子
暮れ満つる窓の外なほ寒茜	寺川 貴也
空近き山の出湯は雪催	石上 敦子
溶岩の中よりひびく虫の声	西澤 勝
江戸つ子に合せし味の煮大根	柳堀 悦子
いふなれば日陰の似合ふ実千両	城戸崎雅崇
スーツケース我先に往く年の暮	木村 英昭
忘年会時間厳守に一丁締	入江 祐子
畑に出てふたりが対の冬帽子	小堀 恭子
数へ日といふ一日の始まりぬ	中村 淳子
小白鳥の旅の途次なり群大さ	山口 容子
夜も力抜かぬ風あり冬銀河	片岡 和子

ふるさとへさそふ訛や年の暮
誰もたれも着ぶくれてゐる影黒し

小川 妙子
大村 誠

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

二月号 2025

小灯に残る一章残る虫
窓際の瓶に日射しの秋の色
おはなしに声色遣ふ寒夜かな
小石にも地球の歴史冬日向
落葉踏む地球の向かう落葉踏む
神社みな海へ向く町乾風吹く
かまど猫いつも主を見張りをる
雪ばんば伏し目の吾について来し
秋灯し母の教へは今も尚
枝先のかすかに震へ鵲の贅
小春日や鱒は釣られてすぐ焼かれ
白足袋の家族分あり古簞笥
花野より呼ぶ声のあり誰も居ず

朝田 玲子
齋藤 亜矢
有岡 萃生
鈴木 大輔
河村 純子
片岡 和子
中井 昭雄
伊東 弥生
植田 清子
大野千鶴子
立石 律子
森 幸子
加藤 広文

木犀や犀星歩きたる田端	宮坂 美緒
カフェラテの泡の消えゆく初時雨	田中 白秋
車座は男子学生芋煮鍋	大石 高典
えんとつがなくともサンタクロースの来	山本 京子
襖替へ轅合はせし御所車	小堀 恭子
山形の盆地や冬の靄に浮く	田中 勝
俊太郎サインの絵本冬茜	佐藤 慎一
体操は日課となりて冬の朝	加藤 節江
静けさの沁みあるを聴く小夜時雨	原 順子
ほろ酔ひや部下を励ます冬銀河	石田 信之
一乗谷を木枯の駆け走りたる	井本 陽子
木枯びゆうびゆう涙目に目薬	入江 祐子
こんな仔と暮したき夜の初時雨	住田 祥子
ストーブに煮物まかせて読書かな	大畑 照子
炉開を祝ふ松風ありにけり	相原 弘子
同じ色二つとはなき柿落葉	小川 豊子
三井寺の鐘澄む日なり響くなり	國兼 弓華
醍醐寺や銀杏色づく空となり	幡山 杏
虫の音や汝の待つ家の窓明り	林 剛
木枯しの夜半とて酒の爛をつけ	矢野 裕俊
秋空へ波打ち響くつづみ岩	大村 誠

殉教の原の城跡石露の花

杉本 伸一

渡り鳥われはこの地に生きてをり

田崎セイ子

霜月や解し乾かし鉢の土

玉元 庄弘

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷筍集

一月号 2025

秋草に分け入る馬の背の揺るる

齋藤 亜矢

ふるふると萩の実の揺れ嘴の揺れ

朝田 玲子

閉店の奥にひとつの灯の夜長

有岡 萃生

札所までつれなき雨や曼珠沙華

田中 白秋

海峡の鳴咽めくなり雁渡し

片岡 和子

影踏みに大人が興じ後の月

福江ちえり

十月の十月桜会ひ得たり

城戸崎雅崇

秋の蚊に献血と洒落見てゐるも

友永基美子

秋深し昔登りし木を撫でて

福地 義雄

弱法師杖の先なる虫の闇

河村 純子

友の子を背負ふぬくもり秋高し

宮坂 美緒

剪られたる木口明るき秋日和

鈴木 大輔

灯を消して明日は離郷の虫の闇	加藤 広文
色変へぬ松や鉄路の延びてをり	加藤 剛
傷つきし林檎やタルトタン焼く	宮坂 千種
大潮の波のたゆらに秋の風	幸城 麗子
新発意も作務衣着せられ木の葉掃く	土居 郁雄
渡り鳥振り返ることなかりけり	古閑 裕海
霧去るを待つてゐる間の足湯かな	西澤 勝
禅寺へ道ふり分けて草紅葉	高橋 房子
素数発見四千万桁星月夜	木村 英昭
羅の尼僧ふはりと茶を運ぶ	世古 一穂
横浜港異国の香る秋の風	野村 幸江
障子貼る今日より新たなる日和	森 裕子
天翔る竜の如きや秋の雲	小長井 敬
石垣の崩れに滲む秋の雨	坂 利美
虫時雨外灯あはき勝手口	大畑 照子
天空に山を浮かせて朝の霧	小西 恭子
指先に洩光らせて柿を剥く	小西 尚美
風来れば風と遊ぶよねこじやらし	中村 淳子
久し振りに浸かる湯船や蚊の名残	齋藤 耐
昼寝しばし里に居たれば永遠のごと	林 剛
秋澄むや聞香の墨する音も	藤木千恵美

米櫃へ音のよろしき今年米

山本 京子

天高し頂はなほ天高し

寺川 貴也

海べりと山路を行き来厄落し

杜 博之

街路灯かすむあたりや虫の声

大村 誠